

【翻訳】

房瑞麗《宋代三家〈詩〉文献成果概要》
其二

甲 斐 勝 二*

翻訳に当たって

以下に翻訳して挙げるのは、房瑞麗^{*1}先生の著書《清代三家〈詩〉文献研究》の第一篇の後半、第二章にあたる部分である。前半の第一章については前回の論叢に、訳出の理由も含めて拙訳を掲載している。興味のある方は参照されたい。

漢代に行われやがて唐代で主に利用された《詩経》毛伝には、それぞれの詩の初めに詩が作られた所以を説く小序があって、その小序に随って解釈されてきたのだが、南宋の朱子の注釈書《詩集伝》にいたると、それを否定して詩自体で理解しようとした。その時朱子が既に滅びてしまっていた魯・斉・韓の各詩説をどのように扱ったか、またその朱子に啓発されて王応麟がおこなった三家詩の輯佚作業の紹介がどのようなものか、それが今回の翻訳の主要な内容となる。

《詩集伝》訓釈については概ね吹野安・石本道明共著『朱熹詩集伝全注釈』（明德出版社／平成8年から平成11年にかけての出版全九冊）に依っている。書籍や篇名は中国の習慣に従い《 》を用い、引用文に“ ” ’を用いたのは其一に同じ。脚注は原注としてつけ、訳者の注は訳注としてあげている。房先生の仕事の一部を紹介できれば幸いだが、訳者の勉強不足や手元資料の不十分さまた思い違いによる誤訳も少なくないことをおそれる。なお、訳文の後ろには訳者の覚え書きを付している。

* 福岡大学人文学部教授

*1 中国・計量大学・人文学院・副教授

二 朱子の三家《詩》学

朱熹（1130 - 1200）、字は元晦、後改め仲晦、号は晦庵、別号は紫陽。祖籍は徽州婺源（今江西省に属す）、尤溪（現在は福建省に属す）に生まれ、建陽（現在は福建省に属す）崇安に移り住んだ。朱熹は群書に博く学び、經学史学の著述の他に、諸子学、仏教学、老莊、天文、地理の学問など涉猟し研究しないものはなかった。

朱熹の《詩集伝》は《詩經》学研究史上の重要な著作で、伝統的な《詩經》研究に対する革新であり、元明清三代にわたり深い影響を与えた朱子《詩經》学を確立したものである。現在の学界では、經学、文学、美学等の角度から朱子の《詩經》学の研究を進めている者は乏しくないと行って良い。しかし、これまでのところ朱子《詩学》における三家《詩》の利用とその展開や発展についての検討はなされていない。南宋の学者王応麟の《詩考》は、散佚して遺された三家《詩》説を博く収集して、専門書の形式で刊行された三家《詩》に関する最初のものであるが、その序では、“朱文公は門人に、《文選注》には《韓詩》章句が多いので、かつてこれを抜き書きしてみようと思ったことがある、と言っていた*¹。私が古来の文献を観察したところ、三家の佚文がまだ多く残っていたので、これら佚文を捜し集め集め、《説文》《爾雅》の各書籍を参考にして、それだけで一編とし、衰微した学問を助け起こし、異なる解釈を広く知られるようにしてみた。それはまた朱文公の意図のはずである。《詩集伝》を読むものの参考になることもあるのではないか”*²と言う。王応麟が朱子の《詩集伝》における三家《詩》説の吸収と利用を褒め讃え、朱子が“浅学の学者たちが残されたものをひたすら守ってきた頑なさを一掃する”ものと考えたのもっともであった。そのうえ王応麟の《詩考》撰述は、“《文選注》には《韓詩》章句が多いので、かつてこれを抜き書きしてみようと思った”と語った言葉に啓発を受けたものでもあった。彼が三家の遺説を集め求めた目的は、“衰微した学問を助け起こし、異なる解釈を広く知られるようにしてみた。それはまた朱文公の意図のはずである。《詩集伝》を読むものの参考になることもあるのではないか”と言うところにあり、この語からは《詩集伝》の三家《詩》説に対する説明不足を補な

*¹ 《文選注》：南朝梁昭明太子編の文学総集。現在五臣注本と李善注本の二種及びそれらを合併した六臣注本が伝わる。ここでは李善注のこと。

*² 原注：南宋 王応麟：《詩考序》、《詩考》に載せる。影印《文淵閣四庫全書》第75冊、台湾商務印書館1983年版、第598頁

い明快にして、朱子のやり残しを補填しようとの創作意図が十分に見て取れる。だとすれば、《詩集伝》では三家《詩》説をどのように用いてその効果を發揮しているのだろうか。朱子が三家《詩》説を掲げた目的や動機はどこにあったのだろうか。

唐代に孔穎達が詔を奉じて《毛詩正義》を編輯作成し、《毛詩》の詩学だけが尊重されるように定まったのだが*¹、毛氏のもは“字句が三家と異なるもの多きこと百を以て数えるほど”^{*2}であることは、周知の事実であった。《文選注》を撰した李善は、注に《韓詩》の説を多く採用している*³。《朱子語類》では門人の李方子が、“《文選注》には《韓詩》章句が多いので、かつてこれを抜き書きしてみようと思った”^{*4}という朱子の言葉を記録するほどである。実際に抜き書きは為されなかったのだが、《詩集伝》において三家《詩》を論拠として引用する箇所は、朱子の三家の《詩》学に対する考えをとともよく示すものである。

《詩集伝》の三家《詩》の利用は、直接引用もあれば、婉曲な引用もあるが、その具体的な引用内容および概ねの表現形式は以下のように分類できる。

第一、漢代の関係典籍、《漢書》と劉向の《列女伝》の記載を主に、《毛伝》と異なる三家の説を探し求め、それを使って《詩》の大義を解釈する。

その最も典型的なものが《閔雎》篇である。篇の初め早々に劉向の《列女伝》と《漢書・匡衡伝》を引用し《閔雎》の大意を論じて、“《列女伝》では、雎鳩という鳥は（何時もつがいでいて）、他の多くのものと一緒に行ったり、一羽だけでいたりするのを見ることがない、概ねその性が然うなのだろう、としている”^と言い、“漢の匡衡*⁵が言うには、（詩の中の語句）窈窕たる淑女、君子の好仇、とはそれが貞淑を尽くしてその操を変えず、情欲の感情は持ちながらも表に示すことなく、うち解けて楽しく語り合うような様子を行為に見せないことをいう、そうであってこそ立派な人物に嫁ぎ宗廟の主となり得るのだ、これが綱紀の初めであり、王の教化の第一なのである”^と。匡衡のこの

*¹ 訳注：唐代太宗のころ孔穎達に命じて儒学の經典の整理が行われた。易・書・詩・礼・春秋の各種テキストから一種が選ばれ、その解釈が進められ、できたのが《五經正義》で、詩経では毛詩鄭箋が選ばれた。永徽4年天下に公布され、以後科挙の基準に用いられて以来、宋に至るまで続いた。

*² 原注：唐孔穎達疏等：《毛詩正義》卷一、十三經注疏本。

*³ 訳注：李善（689没）は唐代前期の文選注釈者、引用注釈の適格さで評価が高い。

*⁴ 原注：南宋黎靖德編：《朱子語類》、中華書局1994年版、第2066頁。

*⁵ 原注：原文は康衡、匡衡のこと。宋の太祖趙匡胤の名を諱んで、改めたものなので、訳文では元に戻した。

言葉に対して、“よく《詩》を説明したものと言うべし”^{*1}と評論している。さらに、本篇の最後のまとめの部分では、康衡（匡衡）の“配偶者の決定は、人々の始まりであり、すべての幸福の原点である。婚姻の礼が正しくあってこそ、各種の事柄は達成され、天命が全うされるものである。孔子が《詩》を論じるのに《関雎》をその初めにおいたのは、太上なるものが民の父母なのだから、后妃夫人の行いが天地の理にそぐわなかったら、神霊の統規も万物の道理も遵奉しようがない。神世以後三代の興廢は、これに皆依るのである”（卷一）の語を引く。この論拠としての引用は、《関雎》の主旨を説明するばかりでなく《詩集伝》の基調も定めるものであった。“概ねその性が然うなのだろう”“情欲の感情”“婚姻の礼が正しく”、などは正しく《詩集伝》立論の基礎となっている。朱熹は《詩集伝》の中で、伝統的な《詩》学が《詩経》の“情”を偽装してきたことに反対し、《詩経》の中の“性”“情”を強調した。朱熹は言う、“聖人の言は、《春秋》および《易》、《書》にあって一字の嘘もないのだが、《詩》に限っては、情から発するものなので、これとは異なるものとなる”^{*2}、“概ねにおいて、古人が詩を作るときには、今の人が詩を作るのと同様で、そこではそもそも外部の事象事物に感じそこに動く情が語られ、情性が吟詠されるものだ、いったい何時他人を誹るものばかりになったのか”^{*3}。“外部の事象事物に感じそこに動く情を語り、情性が吟詠されるもの”というのが朱熹の《詩》論の基礎である^{*4}。《詩》の中にある情を表だって取り上げた事は《詩経》学史において開拓性の意義をもち、《詩経》文学の発展に重要な影響を生み出した。朱熹は宋代理学の視点に立つことが多く、《詩経》で“情”に及ぶ詩篇はみな“淫詩”としてしまったのだけれども^{*5}。朱子の《詩》学の主導思想に基づいて、冒頭の篇の初めに行われる劉向や匡衡の所説の用い方を見返すと、朱子とその証拠に用いる引用には、自分の《詩》学の主張を表明して先に進もうとする努力が隠されているのが見て取れよう。

*1 原注：南宋 朱熹：《詩集伝》卷一、中華書局 1958 年版。以下《詩集伝》の引用はこれによるので注には示さず、巻次だけを示す。

*2 原注：南宋黎靖德編：《朱子語類》、中華書局 1994 年版、第 2100 頁

*3 原注：南宋黎靖德編：《朱子語類》、中華書局 1994 年版、第 2076 頁

*4 訳注：朱子《詩集伝》序文に“詩は人の心の物に感じ言に形なすの余りなり”と言う。《礼記》に基づく。

*5 訳注：朱子の理学思想については専論が多数あるので各人参考人されたい。ここで言う“情”や“情性”は具体的に言えば男女の自由恋愛につながるような情愛をさすもので、それらを歌う詩を朱子の倫理観から好ましくからざるものとして“淫詩”とした、ということ。

《詩集伝》中匡衡の《詩》説の引用は上述の二箇所に見えるばかりだが、劉向の《列女伝》に対する引用は他に二箇所ある。一つは《邶風・柏舟》篇で、“《列女伝》では婦人の詩とする”と引用した後、“いま、その言葉遣いの謙って柔弱であること、また聖人以後に作られたとされる変風の初めにおかれて、それに続く篇章と似ていることを考えれば、莊姜の詩ではあるまいか*1”（巻二）と言う。劉向の説と自分の考証を互いに重ねて、その観点を裏付けようとするのである。もう一つは《大雅・文王》篇で“殷の士は膚しく敏き、京に裸將ぐ”の後に見える。“（引用する）劉向は、孔子が詩を論じて、‘殷の士は膚しく敏き、京に裸將す’のところに来ると、ああと溜息をつき、大なるか哉、天命は、善きこと後嗣に伝えざるなし、是れを以て富貴無常なり、と言ったという。概ね殷の微子が周に事えることを悲しみ、殷の滅亡を痛んだのである”（巻十六）。ここでの引用はこの段の詩の内容の理解を助けて大いに力を発揮している。

第二は、別の学者の論じる《韓詩》の異字を直接列べるか引用するところで、この種の引用は以下の八箇所である。

《周南・漢広》の本文“不可休息”注に引く“呉氏*2曰く、《韓詩》は思に作る”（巻一）。《唐風・有杕之杜》“噬肯適我”には“噬、《韓詩》逝に作る”（巻六）。《小雅・小旻》“是用不集”に“集、《韓詩》就に作る”（巻十二）。《小雅・小宛》“宜岸宜獄”に“岸、亦た獄なり。《韓詩》は犴に作る。郷亭の繫を犴といい、朝廷を獄という”（巻十二）。《小雅・角弓》“見睨曰消”に“曰、《韓詩》、劉向は聿に作る”（巻十四）。《小雅・何草不黄》“何人不矜”に“矜、《韓詩》は蹕に作る”（巻十五）。《大雅・大明》“倪天之妹”に“倪は磬也。《韓詩》は磬に作る。《説文》倪は譬也という”（巻十六卷）。《周南・兔置》“公侯好仇”に“仇、康衡引く《閔雎》は亦た仇字*3に作る”（巻一）。

このような三家の異字の提示は多くはないけれども、しかし《詩集伝》が権威的な地位にあったので*4、その他の学者の《詩経》に関する著作の撰述において一定の影響があったことは、当然に思われる。

*1 訳注：莊姜は衛莊公の夫人、朱子は《邶風・緑衣》の作者とする（毛詩では国人が莊姜を哀れんだ歌とする）。

*2 原注：呉氏は即ち宋代の呉棫のこと、著書に《毛詩叶韻補音》があるが、既に散佚。

*3 訳注：朱子の注では、この前に、“仇與迷同”、とある。《閔雎》の“君子好迷”句の“好迷”を踏まえてのもの。

*4 訳注：、元の時代、中止されていた科挙が始まるに当たって朱子の《詩集伝》がその詩経理解の拠り所として示されたことで、後世の学者に権威性を持つことになった。

第三は、三家の説を用いてはいるが、明示はせず、直接訓釈し、“一に作る”“或いは曰く”等と言ってその内容を示すもので、その後の考証により朱子の訓釈が正しく三家《詩》説から来ると分かるもの。

例えば、《邶風・北風》“其虚其邪”、“邪、一に徐に作る、緩也”（卷二）とある。王先謙《詩三家義集疏》には“魯説に言う、‘其虚其徐、威儀容止なり’。齊説に言う、‘虚徐、狐疑するなり’”と……班固《幽通賦》に“靈訓を承け其れ虚徐し、竚ずみて盤桓し且つ俟つ”、曹大家注に“虚徐は狐疑なり、詩に曰く其虚其徐”と。曹大家注は《齊詩》を使っているから、虚徐を狐疑と訓じているのは、《齊詩》説に基づくのである。魯詩・齊詩で“邪”を“徐”に作るので、韓詩説も同様に違いない*1とある。《邶風・静女》“静女踟蹰”に、“踟蹰、躑躅なり”（卷二）。王先謙の書には“《文選・思玄賦》注に‘韓詩’に愛而不見、搔首踟蹰、薛君曰く躊躇、躑躅なり”、を引用する*2とある。《王風・兔爰》“雉離于置”に“或るもの曰く、網を車上に施く”（卷四）とある。王先謙は“韓説に曰く、車上に網を張るを置という”*3《鄭風・羔裘》“洵直且侯”の句に、“侯は美なり”（卷四）とある。王先謙は“韓説に曰く、侯、美也、…《釈文》引く《韓詩》文”*4という。《幽風・鴟鵂》“予所蓄租”の句に“租、聚なり”、“予手拮据”の句に、“拮据、手と口が共作の貌”（卷八）とある。王先謙は“《釈文》に《韓詩》文、‘口と足で事を為すを拮据と曰う’、を引く。《説文》では据の字の下に、‘手と口と並びに所作有る也’”とある、即ち韓説に基づく*5という。朱子の説が韓詩から来ることが分かる。

《小雅・裳裳者華》“裳裳者華”に“董氏いう、古本常に作る。常棣なり”（卷十三）とある。王先謙は“魯・韓詩は裳を常に作る。《広雅・釈訓》に‘常常、盛んなり’”とある。これはこの詩の裳裳の異文である。《説文》に‘常、或いは裳に作る’とある。《広雅》に引く魯・韓詩は恐らく常常に作っていたのだろう*6と言う。《商頌・殷武》“旅楹有閑”に“閑、閑然にして大なり”（卷二十）とある。王先謙は“《文選・魏都賦》注‘旅楹閑列’に李善注では薛君の《韓詩章句》文を引く”という*7。

*1 原注：清王先謙：《詩三家義集疏》、呉格点校、中華書局1987年版、第202頁。

*2 原注：同上書 第206頁 訳注：

*3 原注：同上 326頁

*4 原注：同上書 第346頁。

*5 原注：同上 329頁

*6 原注：同上書 771頁

*7 原注：同上書 1121頁 訳注：《文選・魏都賦》“旅楹閑列”の部分、李善注は“薛君韓詩章句に曰く、閑は大なり、閑然にして大なるを謂う也”とある。朱子の解釈がこれ

第四、他書の引用をさらに引用する場合、毛氏の説と異なるものは、実はすべて三家に出るもの。

例えば《周南・卷耳》“云何吁矣”の所、“吁、《爾雅注》はここを引いて盱に作る。張目望遠なり”（卷一）。《小雅・何人斯》“云何其盱”の所、“《字林》に云う、盱、張目なり”（卷十二）。《大雅・大明》“涼彼武王”の所、“涼、《漢書》亮に作る”（卷十六）。《大雅・皇矣》“貊其德音”の所、“貊、《春秋伝》、《樂記》共に莫に作る。韓は貊を莫に作る、《釈文》は《韓詩》文を引く”（卷十六）。《大雅・假樂》“假樂君子”の所、“假、《中庸》《春秋伝》共に嘉に作る、今当に嘉に作るのがよい”（卷十七）。王先謙によれば“《左伝》及び《中庸》に《詩》を引くものは嘉樂に作る。……趙岐《孟子章句》に《大雅・嘉樂》の篇、正しく嘉に作る。また《隸釈》に載せる綏民校尉熊君碑にまた嘉樂に作る。だとすれば三家の今文ではみな嘉に作り、これが正字で、毛伝は仮借字なのである”^{*1}

《周頌・天作》“彼徂矣岐”の所、“沈括が、《後漢書・西南夷伝》では‘彼岨者岐に作る’と言う。今考えるに、《後漢書》では‘岨’は‘徂’と作るばかりであり、そこに引く《韓詩薛君章句》でも‘徂は往だ’と訓じるのみで、‘矣’の字だけが‘者’に作り正しく沈括の言葉通りである。しかしながら、その注の終わりでは、‘岐の地は阻僻と雖も’と言うので、岨の意味もあるようだ。韓子はまた、彼の岐に岨有り、というので、別に拠り所があると推測する。したがって今はこれにより、岐の字で句を切る”^{*2}（卷十九）と言う。

《周頌・時邁》では、“《春秋伝》に曰く、‘昔武王商を克す、頌を作りて曰く、干戈を載戢す’と。而るに《外伝》では周文王の頌だとする。であればこの詩は武王の時代に周公が作ったものとなる。《外伝》ではまた、‘肆夏繁、遏、渠を金奏す。天子以って元侯を饗す也’^{*3}、韋昭注に、‘肆夏は一名樊、韶夏は一名遏、納夏は一名渠’とあ

に依ることがわかる。

*1 原注：清王先謙《詩三家義集疏》、吳格点校、中華書局 1987 年版 第 895 頁。

*2 訳注：この部分現在の詩経は“彼徂矣岐有夷之行”。毛詩鄭箋では、“彼徂矣、岐有夷之行”と読む。朱子はこれを、“彼徂矣岐、有夷之行”と読もうとする。今の後漢書の西南夷伝には“詩云、彼徂者岐有夷之行、伝曰岐道雖僻而人不遠”注：韓詩薛君伝曰く、徂は往、夷は易也。行は道也。彼百姓の文王に帰する者、皆岐に易道あり、可く往きて帰るべし矣。易道とは仁義の道にして行い易きを謂う。故に岐の道は阻険なれども人は難からず”（百納本）とある。

*3 訳注：《外伝》は《国語》のこと、《国語》魯語の下にこの語がある。韋昭の語はその注。金奏は編鐘を鳴らして演奏すること。

る。即ち《周礼》にいう九夏の楽曲のうちの三つである。”（卷十九）

第五、《韓詩序》説の二箇所引用。

《小雅・雨無正》の尾評に“元生の劉氏曰く、‘曾て《韓詩》を読むに《雨無極》篇があった、《序》に、《雨無極》は正大夫が幽王を誹ったものであるとあり、その詩の本文といえ、《毛詩》の篇首にくらべ、雨無其極、傷我稼穡（雨それ極まるなく、我が稼穡を傷つける）の八字が多かった’と。私が考えるに劉氏の語は筋が通っているようにみえるようだ。^{*1}”（卷十一）

《小雅・賓之初筵》に“韓詩《序》に曰く、‘衛武公飲酒して過を悔いるなり’と。いまこの詩の意図を考えるに、《大雅・抑》戒（戒の字は衍字）に相類す、必ずや武公自ら悔んでの作なり。当に韓詩の義に従うべきである。^{*2}”（卷十四）

このほかにもう一箇所《韓詩》説を引く。《小雅・鴻鴈》に“《韓詩》に、勞者の其事を歌うとある^{*3}”（卷十）

上述の諸例のなかに朱子《詩集伝》における三家《詩》の利用方法は基本的にすべて反映されている。その後の輯佚による三家《詩》と比べれば、三家《詩》の利用方法はまだまだ不十分だと言わねばならないけれども、非常に影響力もつ灯火のごとく光を伝え、三家《詩》への注意をしめす喇叭のごとく響き渡って、後世の学者の幅広い注意を引いたので、王応麟の《詩考》の撰述が導かれることになるのである。

朱熹は《詩集伝》においてなぜ故に三家《詩》に注意を向けるようになったのか。やはり社会環境、学術環境、《詩経》研究情況そして朱熹自身の学術探究など面からその原因を探らねばならない。

まず、朱子の三家《詩》の利用は、欧陽脩の《詩》学思想の継承であって、“（毛詩）序を以て詩を説明する”事を批判する為に行われた努力であった。欧陽脩の《詩本義》は宋代詩学の開始を示す著作である。北宋欧陽脩の《詩本義》を始原として、《詩経》学界では、毛序を否定したり、毛序を棄てる思潮が次第に強くなっていき、南宋の鄭樵

*1 訳注：ここだけでは朱子は肯定的に見えるが、この後では、二句を増すと詩の体例に沿わないこと、正大夫が幽王をそしると言うのも正しくないと述べて劉説には否定的である。なお、元城の劉氏とは劉安世のこと。

*2 訳注：毛詩小序はこの詩を、衛の武公が時を刺るなり、と言ひ武公が酒に溺れた世情を批判したものだと取る。

*3 訳注：毛詩小序ではこの詩を、離散した民を集めてその営みを復興した宣王をほめるものと言う。朱子はこれを旧説としてあげ疑問を呈している。

の著した《詩辨妄》になると《詩序》を直ちに“田舎者の素人の作”と責め付けるまでになった。しかし、“序に基づき詩を理解する”という局面に未だ根本的な変化があったわけではない。したがって、朱子は厳しくその弱点を攻撃したのであった。《朱子語類》に“私が二十歳の時に《詩》を読んだ時、《小序》は役に立たないように思われた。《小序》を無視し、《詩》本文の言葉を鑑賞してみたところ、それでも筋道がちゃんと通るように思われたのである。当初はあちらこちらの先生に質問してみたが、誰もが、序は棄ててはならない、と言うので、私の疑問は結局解けることがなかった。その後三十歳になると、《小序》が漢代儒学者の作になるもので、その出鱈目なること、言うに堪えられないほどである事がはっきり分かったのである。呂祖謙はうまくつながらないところは《序》にしたがって解釈するばかりなので、牽強附会の所が多かった。私が彼にその事を伝えたと、結局は信じようとしなかった*1。彼の《読詩記》の中では、序に依りながら語るところが多いとはいっても、しかし筋が通らないところは、やはり序は使っていない。私はそこで《詩伝》を作り、遂には《詩序辨説》一冊を作り上げ、その他の出鱈目なところを、詳しく論じたのである”*2と記される。朱熹は若いとき《序》による詩の理解を主張したものの、“役に立たない”と思われ、各地の先生方に質問したところ、誰もが“序は棄ててはならない”と言っているところから、《毛序》が詩を理解する人々に深い影響を与えていたことが分かる。その後、自分自身の感得と詩学に対する素養の蓄積により、遂に序がみな“出鱈目”だと認識するにいたり、《詩序辨説》を著述したというのである。弟子たちとの談論の中には、「序を棄てよ」という朱子の言論があちらこちらに見える。例えば、“《詩》はもともと平明なのだが、最初の序が邪魔なのだ。序は漢儒が作ったもので、《詩》の本意を乱すものである。まあ四字を一句として詩を読めば、自ずから分かってくるものだ。《詩集伝》を作るにあたっては、《詩》の本文を前に持ってきて、その前におかれていた序はまとめて後ろに置き、一つにした”*3、“《詩序》ができたために、《詩》を鑑賞する者は《詩》の言わんとする所が分からなくなってしまった”、“《小序》には分からない所がやたらにある、牽強附会の

*1 訳注：呂祖謙『呂氏家塾読詩記』のこと。

*2 南宋 黎靖徳編《朱子語類》、中華書局1994年版、第2078 - 2079頁

*3 訳注：この発言からすると《詩集伝》には、毛詩の小序がまとめられて掲載されている事になるが、現在残る《詩集伝》ではこのまとめられたという小序の部分は削除されている（著者からの教示による）。後文に挙げられる王応麟の《詩考》序文と照らし合わせれば、朱子が初めに編んだのは今とは違う形のテキストかも知れない。

説が多いからだ”、“《詩序》は信じるに足りないものだ。かつて鄭樵が《詩辨妄》で、《詩序》を強く批判したのを読んだ。その言葉遣いは大変厳しく、すべてが見識の無い田舎者の作だというのである。始めは疑問を持っていたが、その後二編を細かく読み、《史記》や《国語》などの記述と照らし合わせてみると、《詩序》が信じるに足りないものであると分かったのである。かくして、《行葦》《賓之初筵》《抑》の数篇を読んでも、《序》の言うところは《詩》とはまったくそぐわないものであった。これより、その他の《詩序》を見ると、信じるに足らざるものがなんとも多かった。このことから、出鱈目は言うものではない、みな見破られるものなのだ、ということを知ったのだった*1”と言う。朱熹《詩集伝》の創作は、まさしくこのような思想の具体的な実践だったのである。朱熹は《詩序》を全く採用しなかったばかりでなく、三家《詩》を使うことで序を棄てる思想を実践したのであった。まさしくある学者が以下のように述べるとおりである。つまり“当時の偽物を辨別しようとする思潮の中で、多くの学者の《詩経》と《毛序》への態度に大きな変転があった。学者は既に《詩》が毛伝やそこにつけられた鄭箋ばかりで理解できるものではなくなくなって、《齐詩》、《魯詩》、《韓詩》の三家《詩》の伝える《詩》説をあわせて採用し、また自分の理解を用いての新見解を示し、それによって《詩経》三百五篇の深奥な言葉や内容を探求できるようになったので、序によって《詩》を理解するという枠組みから次第に抜け出したのである。朱熹の《詩集伝》は正しくこの辨偽思想の集大成であった*2”。

朱熹が歐陽脩《詩学》思想を継承したことは、三家《詩》の遺説資料に対する認識の上に現れている。例えば、歐陽脩の“《韓詩》遺説はしばしば別の書の中に見える”という言葉は、まさしく朱熹の“文選注には《韓詩章句》が多い”といった言葉の淵源である。

このほか、朱熹《呂氏家塾讀詩記・後序》には、“《詩》は齊・魯・韓氏の説が伝わらなくなってより、天下の学者はみな毛氏の説を仰ぐことになった。毛氏の学を伝えるものは多いのだが、王述の類*3は今皆存在しない。毛詩説を敷衍した者も、ただ鄭玄の

*1 南宋 黎靖徳編《朱子語類》、中華書局1994年版、第2074 2074 2074 2076頁

*2 鄒其昌《朱熹詩経詮釋学美学研究》、商務印書館2004年版、第18頁。訳注：この引用文には幾つかの引用文が使われているが、訳文ではその明示はしていない”

*3 訳注：王述は東晋の王肅の《詩経》関係の著作を云う。王肅には《毛詩注》《毛詩義駁》《毛詩奏事》《毛詩問難》《毛詩音》などの著作があったが、唐代以前に滅びている。唐代陸徳明《經典釈文序録》に“魏太常王肅、更に毛詩を述べて鄭を非とす”とあるの

《箋》があるばかりだ。当初の儒学者たちが《疏義》を作ったが、質の低い解釈を継いだので、百万言の言葉を費やしても二氏（毛・鄭）の枠から出ることはなかった。宋代になると、劉侍読（敞）、歐陽公（脩）、王丞相（安石）、蘇黃門（轍）、河南の程氏（頤）、横渠の張氏（載）になって、自分の視点をうい始め、成果を上げた。その深淺や得失には違いがあるけれども、それより後、三百五篇に秘められた内容がおかげで理解可能になってきた。概ねのところ、齊・魯・韓氏の伝を探求するまえから、学者は《詩》が毛・鄭ばかりを見るものではないことを既に分かっていた。この情況が既に久しくなると、探求する者もますます増え、学説もますます多くなり、同異の議論も紛々として、それぞれ一家言を持ち、もはや謙虚に祖述する意図も消えてしまった。そうなる、学者は従うべき所を見失って、逆に問題となるのではないか。*1 ここでは三家《詩》説が伝わらなかったために、《詩》学が毛氏説を仰ぐのみになったとはっきり述べている。一方、宋人が毛氏への反駁のために“自分の視点をうい始め、成果を上げ”、“三百五篇に秘められた内容がおかげで理解可能になって”、“概ねのところ、齊・魯・韓氏の伝を探求する以前から、学者は《詩》が毛・鄭ばかりを見るものではないことを既に分かっていた”ようになったのだけれども、最終的な結果として“この情況が既に久しくなると、探求する者もますます増え、学説もますます多くなり、同異の議論も紛々として、それぞれ一家言を持ち、もはや謙虚に先人を祖述する意図も消えてしまった。そうなる、学者は従うべき所を見失って、逆に問題となるのではないか”という状態なのである。先に述べた朱熹の意図からすると、朱熹は三家《詩》説をちゃんと伝えることが、学者に“毛・鄭の説ばかりを見る”ようにはさせないためには最もよい有力な武器になると考えていたようである。だとすると、朱熹が三家《詩》説を採用したのは、そこに毛・鄭説への反駁という意図があったことは明かであるといつてよい。

その次に、前人の三家《詩》への関心の影響があったこと。呉国武先生は、“劉敞、歐陽脩、蘇轍などの《詩經》に関する新説は、多くが毛伝、鄭箋、孔穎達《疏》を疑うのが主で、三家《詩》への関心は不十分だった。北宋末の徽宗朝前後に、古い器物、書籍古本などの収集ブームが起こって、儒学者たちの詩説でも、古字、古義、古説などを

で、朱子は“王述”の語を使っている（著者からの教示による）。

*1 原注：南宋 朱熹 《晦庵先生朱文公文集》、見《晦庵集》卷第七十六、四部叢刊初編影印明嘉靖本。

求めたが、中でも三家《詩》を集めまた重視するというのがその一分野だった”^{*1}と言う。朱熹以前、南宋学界では既に三家《詩》の収集と重視を始めていたことが分かる。先述した南宋《詩經》学の著作の中で、三家《詩》に関わる著作には、董道の《広川詩故》、曹粹中の《放齋詩説》、楊簡の《慈湖詩伝》、項安世の《項氏家説》、呂祖謙の《呂氏家塾読詩記》などがあった^{*2}。その中でも朱熹への影響が最も大きかったのが時代を同じくする呂祖謙の《呂氏家塾読詩記》である。確かに呂祖謙は《毛詩》側に立っていた。しかし、その著述である《呂氏家塾読詩記》の中では董道が論じた三家《詩》説を引用している。朱熹が呂祖謙と学術議論のやりとりをしたとき、呂祖謙は《毛詩》の著述の中でありながら三家《詩》説を採用するという具体的な実践を主張している、これが朱熹の思考を刺激しないはずはない。したがって、朱熹は《詩集伝》で更にこれを発展させたのである。

更に、朱熹の考証学の考え方が《詩集伝》のなかに反映していたこと。朱熹は考証学において“相互参照による考証”、“多くの拠り所がある”事を主張している。朱熹は各種資料を利用して新説を展開発展させたが、三家《詩》説は正しく朱熹が見つけた《詩》を理解する新資料であり、また《詩集伝》の大きな特色がそこに反映されているものでもあった。《詩集伝》は先人の適切妥当な説を上手に採用している。例えば宋人の詩説に対しては、欧陽脩以下十九家の多きに及ぶのだが、三家《詩》の遺説の利用は正しく先人の説の採用の巧みさを物語るものなのである。

最後に挙げるのは、これが朱熹の《詩》学における義理の追求の反映であったことである。朱熹自身は理学の大学者なのだから、経学の義理の発揮こそ彼の著述の主旨であった。三家の今文経学が大義の発揮を重んじるという歴史的な特徴も、また彼にそれを採用させ利用させた理由であろう。《詩集伝》における三家《詩》の採用の部分から朱熹の義理の面での追求を見ようとしてもあまり明確にはできないのだが、三家《詩》が今文経学として、社会の現実と結びつけて些細な言葉の中にある大きな意味を生かそうとする歴史的な特徴への注意は無視はできない^{*3}。朱熹が著述の当初において、三家

^{*1} 原注：呉国武：《董道〈広川詩故〉輯考》、《北京大学中国古文献研究中心集刊》（第七輯）北京大学出版社 2008 年版、第 152 頁。

^{*2} 訳注：「房瑞麗《宋代三家〈詩〉文献成果概要》其一」参照（人文論叢 51 - 4 2020 年 3 月）

^{*3} 訳注：皮錫瑞《経学歴史・経学昌明時代》：“前漢の今文説は、もっぱら大義微言（わずかな言葉に大義を読み込む）を明らかにする”という、

《詩》説を用いて自身の義理の面での追求を表明したのは、何か考えがあつてのことに違いないと推測している。

朱熹《詩集伝》中での三家《詩》説の利用は、後世の《詩経》学の発展において、《毛詩》に統一された《詩》説の伝統を打ち破り、ながく忘れ去られていた三家《詩》を学者たちの視野に入れさせはじめ、《毛詩》説に欠けていたものを有力に補うものにしたことを意味する。後の《詩経》研究及び三家《詩》の輯佚に重要な影響を生み出したのである。皮錫瑞は、“王応麟の《詩考序》に、衰微した学問を助け、異なる意義を広めること、これもまた朱文公の意図であると言っているので、三家《詩》の輯佚は、誠に朱子の《詩集伝》によって導かれたものである。その後の范家相、馬国翰が更に取捨を加え、陳喬樞になると一層精密になったが、これは朱熹が先導した事に始まるのだ^{*4}”と言う。朱子の《詩集伝》中の三家《詩》の運用が、王応麟の《詩考》の助けによって、清代三家《詩》輯佚学の発展に影響を与えたことが分かる。

三 王応麟の三家《詩》輯佚学

王応麟（1223～1296年）、字は伯厚、号は深寧居士。慶元（今の浙江鄞県）の人、祖籍は浚儀（今の河南開封）。9歳で《六経》に通じ、淳祐元年（1241年）18歳で進士に挙げられる。学問は深く博く、経学・史学・諸子百家、天文地理などみな考察の対象とし、昔の事象や制度をよく知り、幅の広い考証を行った。《詩経》に関する著作には、《詩考》五卷（《四庫全書》本一卷）、《詩地理考》五卷、《詩草木鳥獸魚広疏》六卷、《玉海紀詩》一卷などがある。その他の著作として《困学紀聞》《玉海》《漢書芸文志考証》等があり、それぞれ非常に高い学術資料価値がある。清人の張佩綸は“私はかつて主張として、本朝の人々の漢学^{*5}は、概ね皆宋の黄氏《日鈔》、王氏《困学紀聞》の流れに詳細さを加えたものにすぎないと考えたことがある^{*6}”と言っている。王応麟の著作の

*4 原注：皮錫瑞：《詩経通論》、《易学通論》に掲載 中華書局 1954年版 第65頁

*5 訳注：ここに言う「漢学」とは清代に盛になった訓詁や拠り所を重視する考証学を指す。漢の学風を継ぐものとして「漢学」と呼んだ。義理を重視した「宋学」に対するもの。

*6 原注：清 張佩綸《潤于日記》、謝梅林整理《張佩綸日記》、鳳凰出版社 2015年版 第485頁。

訳注：黄氏は黄震のこと。

清代の学術への影響が分かるだろう。

清の張金吾《愛日清廬藏書志》の掲載文及び翁景定五年の《詩考》につけられた序からすると、《詩考》ができたのは、景定五年（1264年）より少し前であることが分かる。《宋史》本伝及び《宋志》では共に五巻とする。朱彝尊の《經義考》では六巻として巻首には“三家詩伝授図”があるというが、《四庫全書本》では一巻となっている。現在の通行本は多くが四庫全書に従い一巻とし、書前に王応麟の序が以下のようにある。

漢の時代詩を述べる者は四家あり、師伝も違えば解釈も異なっていた。賈逵は《齊・魯・韓と毛詩との異同》を撰し、梁の崔靈恩は三家のテキストを取り上げて《集注》を作った。現在ではただ《毛伝》鄭《箋》のみが行われ、韓詩は《外伝》が残るのみで、魯・齊詩は随分以前に亡びてしまった。儒学者が詩を論じるときはひたすら毛伝鄭箋を仰ぐばかりで、三家を参考にした者は従来いなかったのである。ただ朱文公《詩集伝》だけは、広い意図と精妙な内容で、長い歴史の上にぬきんでている。《閔雎》についての説明では、匡衡の説を採り、《柏舟》では、婦人の詩として劉向説をとり、笙詩は、音楽だけあって歌詞がないものとして、《儀礼》説を採用する*1。“上天甚神”では《戦国策》説を採り*2、“何以恤我”は、《左氏伝》説を採る*3。《抑》では自身に警戒させ*4、《昊天有成命》では成王の徳を言うものとして《国語》を取る*5。“陟降庭止”では《漢書注》を取る*6。《賓之初筵》は飲酒の後悔として、《韓詩序》を取る*7。“不可方思”“是用不就”“彼咀者岐”は、それぞれ《韓

*1 訳注：朱子が《詩経・小雅》の鹿鳴之什の後ろに続く題名だけのこる数編の詩を笙詩とし、《儀礼》によって篇次を並べ変えたこと。

*2 訳注：詩経・小雅 菀柳の“上帝甚踏”句、朱子注に“戦国策作上天甚神”とある。

*3 訳注：周頌・維天之命に“假天溢我”朱子注に“假、春秋伝作何。溢、春秋伝作恤”とある。

*4 訳注《抑》：朱子注に“衛武公この詩を作り、人を使して日にその側に誦せしめ以て自ら警す”という。

*5 訳注《国語》を取る：朱子注に“この詩多く成王の徳を説く、成王を祀る詩と疑うなり……国語（周語下）に叔向この詩を引いて言いて曰く、是れ成王の徳を道うなり。……此を以て是を証す”とある。

*6 訳注《漢書注》：《周頌・閔予小子》朱子注に“康衡この句を引き、顔注亦云う、神明の楚の朝廷に臨む若し、是なり”とある

*7 訳注：朱子注に“衛武公酒を飲み、過を悔いてこの詩を作る”《後漢書・孔融伝》注に見える韓詩に“衛の武公、酒を飲み過を悔やむ”とあるが、毛詩小序には“衛の武公が時を刺る也”とある。

詩)のテキストに従おうとするものである*1。“禹敷下土方”では、今度は《楚辞》で裏付けを取っている*2。古い師伝を守ってきた末流の愚かさを洗い流し、学ぶ者に諷詠の潤いが行き渡り、なるほどと思うこと跳び上がらんばかりである。文公は門人たちに、《文選注》に《韓詩章句》が多いので、書き出そうとしたことがある、と語ったことがある。私は今に残る記録記述には三家の各種言論がまだ沢山あると考へ、遺されたものを博く集め、《説文》《爾雅》の助けを借りて、それだけで一篇の書とし、衰えてしまった学問を助け起こし、異なる視点を広くつたえようとするのである。これはまた朱文公の意志でもある。《集伝》を学ぶ者はこれを参考にできるのではあるまいか。

序から分かるように、当時の学界に一般に広がっていた“ひたすら毛伝鄭箋を仰ぐばかりで、三家を参考にした者は従来いなかった”という状況に対し、朱子が《詩集伝》を著したことに啓発を受け、王応麟は《詩考》を著述したのである。彼は“衰えてしまった学問を助け起こし、異なる視点を広め”、“《詩集伝》を学ぶ者はこれを参考に”させ、《詩集伝》の有効な補充資料とすることで、読者に《詩集伝》が三家《詩》の意義を発揚させんとする努力を洞察させようとするのだった。そこで挙げられる各種の例は、《詩集伝》で三家《詩》を採録する具体的な方面およびその考え方を概括したのとなっている。つまり、明確に三家側に帰属する劉向及び匡衡の詩説を引用する、凡そ《毛詩》の説とは異なる漢代以前の説を三家側に帰属させる、《韓詩序》の存在は《毛序》の權威ある地位を揺り動かす有力な武器にできる、その《韓詩》の異文は大量に存在している、というものである。この四点は《詩集伝》での三家《詩》運用の方法をまとめたものばかりではなく、《詩考》が三家《詩》の遺説を集める方向を導くものでもあった。

*1 訳注：周南《漢広》“不可休息”朱子注に“呉氏曰く韓詩思に作る”、小雅《小旻》“是用不集”朱子注に“韓詩就に作る”、周頌《天作》“彼沮者岐”朱子注に“沈括曰く、《後漢書・西南夷伝》は彼沮者岐に作る。今按ずるに、彼の書、沮は但だ沮につくる。而して韓詩薛君章句を引くも亦但だ往くと訓じ為すのみ。獨り矣の文字のみ正しく者に作り、沈氏の説の如し。然れどもその注末に復た云う、岐雖阻僻（百納本はこの部分“岐道阻險”につくる。）と。則ち又た沮の意有るに似たり。韓子亦云う、彼岐有沮と。疑うらくは或いは別にその据有るか。故に今これに従う”とある。以上朱子の注は四部叢刊本の《詩集伝》による。

*2 訳注：《詩経・商頌・長發》“禹敷下土方”朱子注に“楚辞《天問》の、‘禹の降りて下土の方を省みる’は、蓋し此語を用いん”とある。

《詩考》は《韓詩》《魯詩》《齊詩》《詩異字異議》《逸詩》《補遺》の六部分からなる。始めに《韓詩》の遺説を列べるのは、《韓詩》の亡逸が一番遅く、唐以来の注釈者たちがしばしばその説を引用するので、かなり多くのものが集められるからである。その次が《魯詩》、その次が《齊詩》なのは、この二書の滅びが早く、文献資料もなかなか見つからず、《漢書》《後漢書》からわずかに数条引いてこられた程度だからである。その次の《詩經異字異議》では、そこに収録する範囲は三家《詩》に留まらず、《毛詩》とは異なるものや今本《詩經》には見えない詩句で各書籍に載せられたものをあれこれと集めている。その次の《逸詩》では、《国語》《礼記注》《大戴礼記》《史記》《左伝》《尚書大伝》での引用に基づき、今本《詩經》には見えない篇目を列べ、また今本《詩經》には見えない詩句を抜き出し、それによって先秦時代に所謂《三百篇》のほか、なお少なからぬ詩篇や詩句が世に朗詠されていたことを論じたのである。最後は特に《補遺》として残されたものをまとめている。《詩考》に引く三家《詩》説は、みな出典が明らかで、その集めた材料を来源から分析すれば以下の通り。

《韓詩》：《薛君章句》《後漢書》《文選注》《文選》《釈文》《説文》《韓詩外伝》《集韻》《漢書》《説苑》《隸釈・漢衡方碑》《孟子注音義》《新書》《太平御覽》《韓詩伝》《初学記》《孟子正義》《左伝》《後漢書注》《貪悪鳥論》《玉篇》《周礼疏》《爾雅疏》《礼記正義》《周礼注疏》《公羊伝注疏》および晁説之、李迂中、董道の説。

《魯詩》：《漢書》《石經・魯詩》《正義》《公羊伝注》《爾雅注》《後漢書注》。

《齊詩》：《漢書》本伝。

《異字異議》：《左伝》《列女伝》《説苑》《新序》《魯詩春秋》《楚辞章句》《説文》《爾雅》《爾雅注》《白虎通》《儀礼疏》《礼記》《史記》《説文》《周礼注》《集韻》《塩鉄論》《論衡》《郡経音辨》《爾雅音義》《漢書注》《広韻》《家語》《文選注》《漢書》《公羊疏》《揚子》《孟子注》《淮南子》《国語》《後漢書注》《荀子》《孟子正義》《水経注》《春秋繁露》《新序》《尚書大伝》及び賈誼、崔靈恩の説。

ここから分かるように、王応麟の三家《詩》資料の搜索収集の来源は範囲が広く、經史子集各部に等しく及び、先秦の典籍から唐代の注疏などの各種の書籍のなか、およそ三家《詩》を記録しているもので、王氏が見つけたものはすべて収録している。これは一面から見ると王応麟の考証学における努力を反映するもので、それは義理の学を考究する宋代の学者の中では大変貴重なものである。また別の一面から見れば彼が渉獵したこれらの典籍が清人の三家《詩》輯佚の基礎を定めたと言えるものだった。清人の三家

《詩》の搜索収集の範囲は概ねこれを出ず、その検討や抜き出しがさらに細やかになり、全面的になったばかりなのである。《詩考》中に“収集される《韓詩》は三百八十三条、《魯詩》は十五条、《齊詩》は十四条。さらに逸詩は五十一条、従って明末に《詩經》に編入された先秦の詩作は、またその資料価値がある”ことになる。^{*1}

上にあげた例から分かるのは、王応麟が《詩異字異議》中、家法とか流派などの概念を用いてはならず、毛伝とは異なる詩説で漢代典籍の中で用いられその帰属がはっきりしないものは異字異議の類に含めていることだ。これは三家《詩》輯佚研究が形成される当初にあって、輯佚の体例、輯佚の方法がまだ未完成であったことを物語るものである。例えば、《説文》中に引かれる異字は、《韓詩》に入れられるものもあれば、《異字異議》に入れられるものもある。《爾雅注》《集韻》の場合でも同様の状況があって、王氏本人が三家《詩》への帰属分類の面で矛盾しており、判断に迷う情況に陥ってしまっていたことが示される。

《詩考》の輯佚の体例により分析すると以下ようになる。

一、ただ異字を列べて、出典を注記するか、或いは更にこれらの異字を解釈し訓詁を付ける。例えば《免置》に“施于中廡”、“廡、九交の道に中るなり（《薛君章句》《文選注》）”。《漢広》に“不可休思”（《外伝》）、《甘棠》に“蔽弗甘棠”（《外伝》）、“勿剗勿伐”（《积文》）と記す。

二、直接訓詁を付ける。《葛覃》に“萋萋、盛なり”（《文選》）。“刈、取るなり。漚、淪むなり”（《积文》）、《卷耳》に“頃筐、欵筐なり”（《积文》）^{*2}。

三、他書に載せる関係遺説で、三家《詩》序及び詩篇の関係する解説などを引く。たとえば、《閔雎》篇では《薛君章句》及び《後漢書》の記載を引き、《韓詩》の義を引き、“詩人の言うところは、雎鳩という鳥は貞潔で配偶者には慎重で、鳴き声で互いを呼び、誰もいないところに隠れるものだ。したがって、人に君たるものが朝廷を退いて私宮に入れば、后妃は節度をもって応接し、守衛が拍子木をたたき、樂人は堂にあがる、宴席の場からもどれば、心身もくつろぎ爽快である、というものだが、この頃の君主はご婦人に入れ込まれておられる。賢人はその兆しを感じ取り、《閔雎》を詠じ、淑女たる者のあり方を説き、姿形行為作法を正しくあらしめんと、当時の情況を諷刺したのであ

*1 原注：陳文采“兩宋《詩經》著述考”載（台湾）《古典文化研究所集刊》花木蘭文化出版社2005年版 第56頁。

*2 訳注：体例に従い“（《积文》）”を補う。

る”（《薛君章句》、《後漢書》“明帝の詔應門に守を失し、閔睢世を刺る”注*1）

《芣苢》の“夫の悪疾あるを傷むなり”（《文選注》、晁説之の論《韓詩序》“夫を傷むなり”）。《漢広》の“人を悦ぶなり”（《文選注》韓詩序）。《汝墳》の“家を辞すなり”（《後漢書注》）。

《詩考》が《詩経》学史および三家《詩》学史上にもつ意義と影響の面から考えると、以下の幾つかの点が見いだせる。

一つめは、当時の学术界が詩序を棄てようとする思潮の影響をうけ、《詩考》は実際の行動で《詩序》廃すべしに応えたもので、それは朱子の《詩集伝》の思想を援護するものであったこと。

王応麟の学問は朱子の系統を受け継ぐものである。元朝の延祐元年（1314）胡一桂が《詩考序》で、“私は四家のうちその三家が早期に絶えて、あちこちに散らばってしまったことが残念でたまらなかった。朱子の手にすべて収められたわけではなかったが、聖人の經典にまとめられたのはその道の幸せであった。さらに幸いなことに《詩考》が遺り、読むものに毛氏が無理をしている場所も分かるようになって、朱子が《小序》を否定したことが妥当であることに納得し、また末の世の師匠が不完全なものばかりを伝えてきた愚かさを悟ったのだった。これこそ私が誠に‘衰えた学問を助け起し、別の視点を広め、朱子の《集伝》の羽翼となるもので、これにより当代に知らしめ万世に伝える点において、その功績は誠に簡略には論ぜられるものではない’、の語を真実だとするに足る所以である。そういうわけで《詩集伝》の後におくことにしたのである。四方の友人とこれを共有し、それを使って朱子の《詩序辨説》学べば、彼の論が誠に万世にわたり改めることのできないものである知るだろう”と言っている*2。

《詩考》は朱子の啓発に導かれたもので、王応麟は《詩序》の中で、《詩集伝》の三家《詩》採用について、“各種事象に対する説明や示唆は、千載にそびえ立つ”もので、“末の世の師匠が不完全なものばかりを伝えてきた愚かさを一気に流し去り、学ぶものは諷詠し潤されてなるほどと思うこと跳ね上がらばかり”にさせられるものだと言及する。さらに自身が著した《詩考》は完全に朱子の影響を受けたものだと言及する。また、文公は門人たちに、《文選注》に《韓詩章句》が多いので、書き出そうとしたことがある、と言っ

*1 訳注：《後漢書・明帝紀第二》

*2 原注：清 張金吾 《愛日精廬藏書志》卷三經部、清光緒 13 年吳興靈芬閣集字版校印本。

たことがある。私は伝えられる記述には三家の各種言論がまだ沢山あると考え、遺されたものを博く集め、《説文》《爾雅》の助けを借りて、それだけで一篇の書とし、衰えてしまった学問を助け起こし、異なる視点を広く伝えようとするのである。これはまた朱文公の意志でもあるのだ。《集伝》を読むもの、これが参考になるであろう”と言うのであった。王応麟が《詩考》を作った目的は、《詩集伝》を継承し、《詩集伝》が三家《詩》説を利用した思想を大きく発揚することだったのである。

二つめは、清代の三家《詩》輯佚に影響を与えたこと。

《四庫全書総目》巻十五《詩考》提要では、“古書が散逸してしまうと、探し集めるのは難しい。後人が次々に次々と加えて増やしていくが、創始者に比べれば、楽なものだ。道の開拓者は、詰まるどころ王応麟をその初めとすべきである”^{*1}という。王鳴盛は《採集群書引用古学条》でやはり“古学で既に滅びたものを、後人が群書の中から採集して一編とする、この方法は王応麟の《周易鄭康成注》及び《詩考》に始まる^{*2}”と考えている。章学誠は《校讐通義》の中で、“昔王応麟は《易学》は王弼の学のみ伝わり……また四家あった《詩》は《毛伝》のみが残るばかりであったので、群書に見られる三家の《詩》説を採録して《三家詩考》を作った。これを嗣いだ好古の士がそのやり方を継ぎ、しばしば多くの篇を探して佚文を集めた”^{*3}という。梁啓超は《中国近代三百年學術史》の中で、“輯佚の作業、これに最初に従事したのは、宋の王応麟で、《三家詩考》、《周易鄭氏注》各一卷にまとめられ、《玉海》の中に刻まれて、今に伝わる”^{*4}という。

清代学者の評論から見いだせるのは、王応麟の《詩考》の輯佚は輯佚の作業の初めであり、さらに清代の三家《詩》輯佚の模倣対象であったと認めていることである。したがって、王応麟の《詩考》が清一代の三家《詩》輯佚に影響を及ぼしたといっても些かも誇張ではないのである。

三家《詩》輯佚開始の作であれば、“新たに始めることは難しく、遺漏も沢山ある”もので、《詩考》にも少なからぬ欠点があり、後人から責められている。例えば范家相《三家詩拾遺》では“王厚斉（応麟）《詩考》は経・伝・諸子・歴史書及び《説文》《爾雅》

*1 原注：清 永瑛等：《四庫全書総目》中華書局 1965 年版 第 126 頁

*2 原注：清 王鳴盛：《蛾術篇》巻二、《統修四庫全書》影印本

*3 原注：清 章学誠：《校讐通義・補鄭篇》、上海古籍出版社 2009 年版第 33 - 34 頁

*4 原注：清 梁啓超：《中国近三百年學術史》東方出版社 1996 年版、第 319 - 320 頁

に引くもので、《毛氏》とは字句が異なるものを、三家《詩》にまとめて入れている。博学を極めたものと言わねばならないのだが、配列にいささか思想が欠けている*1”と言ひ、また“昔朱子が《文選注》の中から《韓詩章句》を採集しようと考えたことがあった。深寧の王氏はそこで《詩考》を作った。しかしながら、手当たり次第に集めたので、漫然として筋道がない*2”と言う。《四庫全書総目》は《三家詩拾遺提要》の中で《詩考》に論及し、“逸詩篇目を加える時、諸子が持ち出してきたものを雑然と採用していて、選択の基準が些か欠ける*3”という。このような引用は、《詩考》の配列方法が不明、体例も不統一、前後の重複、出典が未詳、考証が不正確などの面で納得できない、というものだ。しかしながら、初めて創り上げたという功績は、いずれにせよ明白である。後人は《詩考》の基礎に立ち、三家《詩》の搜索考証を続け、三家《詩》の輯佚に重大な成果を手に入れている。清代の三家《詩》輯佚の著作のかなり多くのものが《詩考》の増補であり、考証校訂であった。王応麟の《詩考》は、清代の三家《詩》輯佚の基礎であり、清代の三家《詩》輯佚研究領域の展開に影響を与えたものだったと言ってよい。

上述よりわかるように、宋代儒学の三家《詩》の利用は以下のような姿で示されている。

一つめは、三家《詩》の序を用いて毛序を否定したこと。三家《詩》序の存在は、《毛詩序》への大きな挑戦となった。三家《詩》の序が毛詩序への反駁の有力な証拠ともなったのである。宋代當時序に反対する多くの学者は三家《詩》序を拠り所とした。例えば鄭樵は《詩辨妄》の中で、“もし子夏が伝えた序であったとすれば、なぜ齊や魯の詩説が先行した折りに学者は伝えず、後出の趙の毛氏で出てくるのか。序が趙の毛詩になって出てきたとすればいったいどこにこの学問が伝わっていたのか*4”と言って、齊、魯詩序と毛序との違いから、《詩序》を子夏の作とすることが根拠不足だと指摘し、淵源の観点から毛序説に反駁している。

二つめは、三家の説で毛伝の欠を補うこと。これは三家《詩》説を集めるとも重要な作用と目的であり、また清代の学者が三家《詩》の輯佚研究に力を注いだ重要な動因

*1 原注：清 范家相：《三家詩拾遺》台湾新文豐出版公司 1985 年版 叢書集成新編第 56 冊、第 333 頁。

*2 原注：同上書 第 338 頁。

*3 原注：清 永瑤等：《四庫全書総目》中華書局 1965 年版 第 135 頁。

*4 原注：南宋 鄭樵 《詩辨妄》、顧頡剛輯本、《統修四庫全書》影印本。

でもあった。宋代の一連の学者たち、例えば呂祖謙、楊簡などは、確かに《毛詩》を崇拜していたが、その著述の中では三家《詩》の引用も少なくない。その目的は彼らが三家《詩》の説く所が《毛詩》の説を非常によく補充し、また完成させると見たところにある。かなり早期の劉安世も、「昔若い頃《韓詩》にある《雨無極》篇を読んだことがある。《序》には、正大夫が幽王を刺するなり、とあり、その詩の初めには、‘雨極まるなし、我が稼稿を傷む。浩浩たる昊天、その徳を駿からしめず’ とある。詩の中では正大夫が家居を離れる事をうたうが、それは《序》にいわゆる正大夫に他ならないのである*1」と言う。《毛詩序》では、“《雨無正》、大夫の幽王を刺するなり。雨、上から下るなり。衆多きこと雨の如し、而して政をなす所以を非とするなり*2” とある。劉安世は《韓詩序》の説を使って《毛詩序》を補充したのである。劉説は後世の学者から疑問を呈されているとはいえ、その三家《詩》の説く所を以て毛詩を補充しようとする意図は非常に明かである。

三つめは、三家の説を用いて毛説に反駁すること。朱熹が《詩集伝》中で、毛説を棄てて用いず、“序を使って詩を説明する”ことは許されないと責め、三家《詩》説を採用して“詩によって詩を解釈する”という主張を実現しているのは、三家の説を用いて毛説に反駁する具体的な実践であった。一方、序を尊ぶ学者の方は三家《詩》説の存在が《詩序》の權威性の確立に対する脅威であると思われたので、三家の説に反駁することになる。例えば、范処義の《詩補伝》*3では、凡そ詩の内容を論じる諸家で《詩序》と異なるものに対しては、すべて《詩序》を証拠に反駁し正そうとする。そこでは、三家《詩》説への反駁が最も多く、三家の中でも魯説に対するものが特に多く、魯説の中でも劉向《列女伝》及び《新序》等の書に出てくるものに反駁し正そうとするものが最も多くなっている。

四つめは、三家の説で詩を解釈しようとする。例えば歐陽脩は《閔雎》を周の衰えたころの詩と認定したが、その理由は“三家が《閔雎》を康王の政治が衰えた時の詩だとしている。司馬遷が、‘周の道德が欠け、詩人はそのために朝廷の宴席で《閔雎》を作った’と言っている”からであり、さらに孔子が《閔雎》を“哀しいが傷つけず”

*1 原注：清 朱彝尊、朱昆田校、《經義考》卷百、乾隆四十二年（1777）本。

*2 原注：唐 孔穎達等：《毛詩正義》、十三經注疏本。

*3 訳注：宋 范処儀《詩補伝》、四庫全書提要に依れば、“南宋の初め最も序を攻撃したのが鄭樵であり、最も序を尊んだものが范処義だ”という。

と言った語を引いてその証しとしている。当然ながら、その後の朱熹が《詩集伝》中で三家《詩》説を選択し利用したのはこの分野で更にそのねらいを発揮したものである。

三家《詩》説が上述の領域で一定の作用を発揮したので、三家《詩》説を搜索収集し整理しそこから研究を進めることが、《詩経》学の発展を全面的に理解する前提となった。両宋時代に《詩経》の毛序を廃し毛説を棄てるという経を疑う思弁的な学風の発展をへ、また多くの学者による三家《詩》説の力のこもった肯定によって、朱熹の《詩集伝》において、三家《詩》説が具体的実践に用いられるにいたり、遂には南宋末年の王応麟が三家《詩》説の輯佚を始め、初めての三家《詩》輯佚研究の专著——《詩考》を作り上げたのだった。《詩考》ができあがったのは決して偶然ではなく、《詩経》学界の長期にわたる探求の成果だった事が分かつて。また、三家《詩》説の発掘も《詩経》学発展の必然だったのである。

訳者覚え書き

朱子の詩論の意味については、訳者にそれを論じるに十分な素養があるわけでもなく、また先人の論考もあるので、ここでは訳者の文論研究の角度から考えている事について、其1の「翻訳に当たって」で挙げた話をもう少し具体的に記しておきたい。

漢代に經典化され宋代に朱子が注をつけた『詩経』はもとは「詩」と呼ばれ孔子学派の学習書だったようである。その後儒教が漢代に国家経営の主要学問として取り上げられることにより、その始祖の孔子は聖人となり「詩」は孔子の編纂による經典『詩経』となってしまうと、その詩が語る内容に対して統治者階層にとって都合の良い解釈が施され始める*1。その結果、特に各地の歌謡を集めたときされる「国風」に至っては、その内容について牽強付会とも思われる解釈も出てくることになった。とりわけ、家の継続が大きな意味を占めた中国の王朝時代では、本来は個人の自由な情愛を歌った詩をどう扱うか、これが解釈者の頭を悩ますことになったと思われる。各地の歌謡を集めたときされる国風には、恋の歌も多かったからである。恋の歌は人間の社会である以上どこにで

*1 この情況は孔子が編纂したときから既に起こっていた可能性はあるのだが、今残る注釈からわかるのは漢代以降である。

も生まれうるものであり、それ自身は自然なものである。しかし、恋愛の思いを歌うのは、極めて個人的なものである。もしこの個人の情愛を無条件に認めてしまうと、自由恋愛を認め自由な婚姻を肯定することになりかねない。しかしそれは婚姻によって家を支える夫人を確保し、また家と家との結びつきを利用しながら社会の安定を期待し続けてきた中国従来思想とは相容れるものではない。これについては巴金の『家』に見える婚姻を巡る悲劇などはその状況を語る良い例だと思われる。したがって、今となっては、単なる個人の愛情を歌ったばかりだと多くの人が認める歌でも、また通常読めばそう読むのが妥当に思えたとしても、それが国家を支える思想として学ばねばならない『経典』となってくると、単純にそう読むべきではなく、そこにこめられた聖人のねらいを洞察しなければならない、ということになってしまう。

例を挙げてみよう。以下に引くのは『詩経』国風に収められる鄭風「有女同車」の詩である。訳文は現代の解釈である。

有女同車	顔如舜華	咲いたむくげの華のよな	可愛い娘と合乗りで
将翱将翔	佩玉瓊琚	ゆけばゆらゆら	佩玉かざり
彼美孟姜	洵美且都	きれいな姜の姉むすめ（孟姜）	ほんにきれいでみやびてる

有女同行	顔如舜英	咲いたむくげの華のよな	可愛い娘と二人ずれ
将翱将翔	佩玉将将	ゆけばチャンチャン	佩玉の音
彼美孟姜	德音不忘	きれいな姜の姉むすめ	やさしいことばがわすられぬ*1

ご覧のようにこの詩は、「可愛い愛の民謡」*2、「貴族の男女の恋愛歌」*3「同車する孟姜（人名）を賛美するもの」*4とされて、情愛歌としてみるのが現代では一般的となっている。

これに対し、漢の毛伝は鄭玄の箋を見る限りこの詩自体の内容理解はほぼ同じに思われるのだが、詩の主題を「鄭の荘公の嫡子忽（昭公）が斉と婚姻関係を結ばなかったこ

*1 目加田誠『定本詩経訳注（上）』目加田誠著作集第二巻龍溪書舎 S58.9

*2 同上、なおそこでは毛詩説を「もとより余りに付会の説にすぎる」とする。

*3 『詩経訳注』上海古籍出版社 1985.2

*4 『詩経全釈』貴州人民出版社 1981.6

とを批判する歌である。太子の忽は以前斉を救って功績を挙げたので、斉公は妻を与えようと願った。斉の娘は賢かったが忽は娶らなかった。その結果後に大国の助けを得られず、放逐されることになった。そこで国人がこれを風刺した詩である」、として史実に結びつけ、社会風刺説に立った解釈を説く（記事は『左伝』桓公 11 年に見える）。したがって、この恋愛歌は、もし娶っていればこれほど素晴らしい女性と同じ車に乗れたのに、と仮定しての作だと理解すべきだと主張することになった*1。ここにはかかる情愛の詩が『詩経』に掲載されたのは、国の指導者への諷刺の詩であるが故だという理解がある。『詩経』の詩を政治教化と結びつけねばやまない姿勢が読み取れよう*2。さればこそ、官僚候補者の経典となりうるのである。

これに対して毛伝からほぼ千年時代が下る宋代の朱子の注では「この詩もまた淫奔の詩ではあるまいか、同車する女の美しさがかくの如きをいい、また溜息をつき、その麗人の孟姜は、まことに美しくまたしとやかであると言うのだから」と述べ、単なる恋の歌だという理解を示唆する。朱子はこの詩を国人の忽への諷刺と見るより「淫奔の詩」と疑り、男女の情愛を歌うものと見る方がふさわしいというのである。朱子にとって、この詩は「社会風刺」としての意味はなく、所謂個人の情感を語る情愛詩として解釈されている事に注意したい。鄭風の詩にはこのような淫詩が七分の五を下らないと朱子は見のだが*3、ではかかる「淫奔詩」が経典である『詩経』になぜ掲載されるのか、それは如何にして正当化されるのだろうか。朱子に依れば、孔子がこの『詩経』を編纂したのは「学ぶものによつてその得失を考える手立てとさせ、善いものはそれを師とし、悪いものは改めるようにさせる」*4 ためであり、それはまた「聖人がこれ（淫乱

*1 孔穎達の疏に「経二章、皆、假に鄭忽の実に斉女を娶り之と與に同車するの事を言い、以て之を刺るなり」とあるに依る。

*2 後漢の頃に三家に遅れて現れた毛詩がやがて漢では国家公認であった三家詩を凌駕し、やがて唐代になるや科挙と連動して中心的位置付けを得たその理由は、このような社会事情と関連付けたがる視点が、作詩家であることを求められた当時の士人文人達の心情に添うものであり、彼らが社会的正当性を確保するために求められたからだと筆者はみている。これについては別に考えてみたい。

*3 朱子は鄭風の詩について「鄭衛の音楽は、共に淫声である。しかし、詩を考えると、衛詩三十九、その内淫奔の詩は四分の一に過ぎないが、鄭詩は二十一、淫奔の詩は七分の五を超える。衛詩は男が女を喜ばせる詞が多いが、鄭詩は女が男を誘惑する語ばかりである。衛人には批判叱責懲らしめの意図があるが、鄭人には蕩然として羞恥や悔悟の兆しもない。これが鄭声の淫が衛よりも甚だしいところである。……」と言う。

*4 『詩集伝』序

の詩が多い変風)を残したのは、上に立つものがその教えを失うと、民は欲が動いて情が勝り、その弊害がこうなると示そうとしたため^{*1}だということになる。つまり聖人ではない人々に起こりうる各種善悪の情感を提示した勸戒の教えとして『詩経』はある、と朱子は考えるのだった。聖人の教訓集として『詩経』を位置づけることで、恋愛詩の存在を認めようとしたのである。当然ながら勸戒の基準が恋愛の賛美にはないことは「淫奔」の語の使用でわかる。このような情愛は当時の道徳では勧められるものではなかった。

したがって、南宋に生きた朱子の解釈も「漢以来の『毛詩序』の迷信を打ち破ってこそ、『詩経』理解の新しい道を切り開ける」ものとしてその姿勢を評価されながらも、「相変わらず封建思想の束縛を受けていたので、正確に中国古代の優秀な詩歌遺産を正確には理解できるはずはなかった^{*2}と論じられることになってしまう。しかしながら、情愛詩として認定して注釈を行った朱子の功績は、現代的解釈を導く為にはやはり大きかったと言わねばならない。なぜならば、個人の情愛を「淫奔」と見なす当時の社会道徳が失われ、恋愛を個人の自由として謳歌しうる道徳の時代が来れば、このような詩も単なる情愛詩に過ぎなくなるだろう。それは現代における理解にほかならないからである。朱子がそのように理解できたのは、それまで権威としてその解釈を規制してきた毛伝を否定できたからであるが、この時に大いに役立ったのが、毛伝に先立つ漢の三家《詩》説の利用であろうと、房氏の論考からは推測されるのである。

*1 『朱子語類』 卷八十 (中華書局 1986.3)

*2 『詩集伝』 説明 (上海古籍出版社 1980.2)